

2019年3月3月28日

三野勝義

それぞれの「生死観」

上のタイトルのつけ方は言葉の意味からすると正確さを欠きます。私の独断で生死「しょうじ」を強調したいために思い付いたものです。

生死は仏教語で生老病死を意味します。

私が話しかかったのは一般的に使われる死生観についての問いかけです。従って話のタイトルは

(私たち)それぞれの死生観は？ 　　です。

私が日頃目にしている死亡欄をよく見ると70代半ばから80代半ばの人が圧倒的に多い。私たちはまさにその真っ只中にいる事になる。死は目の前の待ったなしの現実です。

死んだら何も無くなってしまふのだから考えてもしょうがない。果たしてそうだろうか？

問題はこの現実をどのように受容するかが、残された生を積極的に生きるかではないだろうか！

自分のことで申し訳ないのですが私はこの八期のあつまりが大好きです。

それぞれが自分の考えていること、やってきたこと、今興味のあることを自由に他の人に伝える。そのために資料を調べ、関連する本を読み、2時間にまとめる。それを聞きに毎月ここに集まってくる。他にあまり例を見ない素晴らしいことだと思う。

そんなこの約20年間の中で、それまでは全く交流の無かった同じ8期の人と親しくなったり、話の内容に共感したり、新しく学んだり、沢山の感動を受けてきた。

八代君の酒の話、飯田君の船の話、須田君の2回にわたる学術的にもレベルの高いファジィの講義、大塚勘治君のミステリーの話、河崎君のタイガース讃歌のパフォーマンス、大室君の韓国での企業活動経験。これらの丑寅の仲間はこの

ちらの世界から旅立ってしまった。

私も「老病」に來ています。

最近は幻燈を使うことが多いが目も悪くなって暗いところでは字が読みにくい、そして最も残念なのは講師の皆さんの声が聞き取れない。

出来ればゆっくり声を出して一語一語、話して欲しい。ボードの字は大きめに書いて欲しい。皆さんの話を楽しんで学びたいと思っています。

教えるとは 希望を語ること

学ぶとは 誠実を胸に刻むこと (大島博光訳)

Luis Aragon ストラスブール大学の詩(うた)の一節

キリスト教(ルーテル教会派)の死生観

「死の問題」。これは人間の歴史とともに古いといえるだろう。「埋葬」という行為は、他の動物にはなくて、人間だけに見られる最も原始的な宗教行為だとしばしば指摘される。誰も死と出逢わない人はいないし、逃れることもできない。まさに「死」は人間にとっての普遍的な問題なのである。(石居基夫 ルーテル神学校校長)

死の理解

「死」は人間の被造物性を表している。神に造られ、与えられたこの世の命を生きること。この命は永遠ではない。「死」は土の塵から造られた人間の有限性・被造物性を意味している(創世記二・七)

「死」は人間の罪の結果として理解されてきた。神に「よきもの」として造られた筈だったが、神に逆らい罪を犯して樂園から追放され、「死」を恐れて生きる者になっている。

これら二つの理解は神との関係の中で私たちの命が考えられている点だろう。そして罪との関わりの中で私たちの「死」を考えることが重要な問題になっている。

日本人にとって、今、死ぬということの宗教観、死生観は…

①自然志向型の宗教性(観)

自然の大きないのちの循環の中に自分を預けていくような宗教観

②共同体型志向の宗教性(観)

家の中に仏壇や神棚を置き死んだ人はそこに居ると考えるられている。家族はそこにお供えをして、みんなで一緒に食事をして、何か大事なことがあれば報告もする。「おばあちゃん、今度結婚することになりました。」と。死んだ人はいなくなるのではなく、共同体の中で生き続ける。

私たちを取り巻く環境

かつて私たちの目の前に有った自然は今や大きく姿を変えている。山(里山)や森などが私たちの周りから失われ、住宅が立ち並び、中心都市近隣には大きなビルが建てられ今や死者が還る所も無くなっている。

家族ノカタチも世の中の産業構造の変化の中で子供たちは家を出て生活の基盤を移して元の家には戻らない。

いわゆる核家族化が進み小さな単位の家族の中でも子どもたちは子供部屋に籠り食事もみんなバラバラで家族が顔を合わせる機会も少なくなっている。亡くなった親や親族はもう身近にはいない。

ご先祖様は人々の心の中には生きていない。

自然も共同体も失われて、かつて身近にあった伝統的な宗教性、言わば「死」の受容システムは機能しなくなっている。

「死」のもうひとつの現実

かつては理想的な「死」として畳の上で死ぬことを挙げていた。このことは生まれ育った家で家族に囲まれて「死」を迎えたい、という率直な気持ちを表している。しかし、現在ではそうした言葉はほとんど聞かれなくなった。「畳の上」は現実的ではなくて「病院のベッド」の上で終わりを迎えている。

「死が隠されている」ということでもある。

生命科学、医療技術の進歩は生と死の自然も作り替えてしまった、とも言えるのではないか？ 病の克服や「いのち」が救われる側面と同時により一層「生」と「死」を人間が手のうちにコントロールして来たことも事実であろう。

現実的な対応

Q.O.L (クオリティ オブ ライフ) いのちの質、生活の質、自分らしく人間としての尊厳をもって生きる。

- ①社会的資源の活用
- ②リビング ウィル
- ③エンディング ノート

「死」に対しての最後(?)の問題

以上を踏まえても尚問題なのは私たちにはどうにもならない、選び取ることのできない「死」の深い闇の問題です。「死」一般的な理解の問題ではなく「私の死」です。キリスト教ではスピリチュアルの問題だと言っている。

①生きることの根っこにある一番深い問題。「存在の肯定感」をどのように得ていくのか？

②「意味の問い」 生きている意味。生きていていいのか？

③「死後への問い」 死んだらどうなる。死ぬとはどういうことか？

④「不条理な問い」 なぜ私にこんなことが起きるのか？

これらの問いに人間は答えを持ちえない。だからこそ人間を超えた超越的なものの中に答えを見出すのだ。これがスピリチュアルの問いであり神以外に分からない事。

天国とは死んでから行く場所か？

イエスは神と人間との関係を話している。生きている者も死んだ者も神との正しい関係の中にはあることで「天の国」にあると考えられている。生きる結果「天国」に行くのではなく、「天国」を生きるのである。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない」(ヨハネ11・25—26年)

「人間は誰でも死ぬ」ということと「私が死ぬ」ということはまったく別のこと。「私の死」は「神の怒り」として理解される。消えてしまう存在の「私」ではなくて、神に裁かれるべき「私」。そんな「私」の存在こそ実は私の深い嘆きの源である。

罪と死と神の赦し

「私の死」は消えてしまうに過ぎない存在の私ではなくて裁かれるべき「私」の問題。神が「私」を裁く。神は裁くことに増して愛してくださる。どうしようもない「私」が、かけがえのない「私」として愛され生かされる。それが十字架を通して与えられる「赦し」の奇跡である。